

特集 ①:ミュンヘン・ハイエンドショー

High End 2015 in Munich

＝益々活況をおびてきたハイエンド＝
～今年もまたミュンヘンから熱い風が吹いてくる～

森 芳久 編集委員

今年も初夏のオーディオ風物詩、ドイツのハイエンドショーが5月14日から17日まで、ミュンヘンのM.O.Cで開催された。

今日では世界的にオーディオ催事の衰退が見える中、ここだけはまるで別世界のように大賑わいだった。それはこの催しを主催しているドイツ・ハイエンド協会が来場者の期待を裏切らないよう毎年素晴らしいエンターテインメントを提供し続け、そのための周到な準備を業界と共にやり遂げていることの成果であろう。常にユーザー目線を意識し、その半歩先を歩んでいることが見て取れる。また同時に世界中のオーディオ関係者への働きかけも非常に積極的に行っている。例えばプレスや業界関係者に対する告知やニュースは、昨年のショーが終わった事後報告から今年のショー開催日まで毎月のように配信され、ショーの期待感を盛り上げている。最新技術やトレンド的な話題を紹介しながらも、同時にアナログレコードやアナログオープンテープ再生技術、また真空管アンプなどについても同じレベルで取り上げ、その判定は来場者の眼と耳に任せる。そして何よりもオーディオという立ち位置から振れることのない姿勢が、多くのオーディオファンや音楽ファンそして各メーカーからの支持につながっているのだろう。

また、ドイツ・ハイエンド協会では海外や遠距離からの来場者のためにホテルの特別幹旋や、期間中の空港や特定のホテルから会場までの無料送迎バスなども定期運行し来場者への便宜を図ってくれている。

これらの努力が実を結び、下記の表のように今年も21世紀に入ってからの最高の入場者数や出展社数を記録することになった。

	2013年	2014年	2015年	前年比%
会場スペース	20,000 m ²	26,500 m ²	27,610 m ²	+4%
出展社数	363	452	506	+12%
報道関連者数	481	482	504	+5%
業界関係入場者数	5,211	5,387	6,588	+22%
一般来場者数	10,948	12,468	14,079	+13%
トータル来場者数	16,159	17,855	20,637	+16%

(但し、トータル来場者数には報道関連者数と出展社バッチを持つ2,801名の出展社数は含まれていない。また、上記の数量は第三者機関による厳正な数字であり、これがドイツのショーの公表数字の権威を保っている)

筆者は毎年欠かさずこのショーには顔を出すようにしている。既に現役を退いた身ではあるが、だからこそ見えてくるものも多い。いつも新しい発見があり、会場は楽しさに満ちている。今回はショーの初日から最終日まで、4日間ほとんど終日会場で過ごしたほどだった。一人のオーディオファンとしてまたユーザーとしても、日本からこのショーのためにわざわざ出かけてくる価値が十分にあると実感した。ここで世界デビューを果たす新技術や試作品、そして新製品を見ることも大きな喜びであるが、一年に一度のチャンスながら多くの友人・知人との旧交をあたためることができる。ここに行けば必ず会えるオーディオ友達が少なくないのである。これもまたこのショーの大きな魅力であり楽しさなのだ。

今年の大きなトレンドは、昨年よりこのショーでも注目を集めたハイレゾ・ダウンロード関連の展示が多く見られたこと、特にハイレゾ対応の小型 DAP、そしてヘッドホンなどを展示・デモする出展社が増えたことだ。またこれに便乗したかのようにヘッドホンアンプの出展も目立った。面白いことにハイレゾが話題となる一方で、アナログレコードやアナログテープ関連の出展社も増えたことだ。全出展社数もこの数年間で急増し先の表のように今年は過去最高の 482 者を大幅に越え 506 社を数えた。

ハイレゾの推進者ソニーは昨年に続き今年もまた出展を控えたため、来場者から失望の声が少なからず上がっていたが、パナソニックが新生 Technics として比較的大きなブースで展示デモを行い日本ブランドの頑張りを示していたのが印象的であった。この Technics ブースについては同号で、井谷哲也氏が出展社レポートとしてショー内容と合わせて詳しく述べられているので、是非そちらもご参照いただきたい。

今年の最も大きな話題と人気を集めたイベントは、DSD ダウンロードによるサラウンドのサウンドデモだ（(写真 4a、4b 参照)。これまで SA-CD の 2ch ステレオ再生は多かったが、本格的なマルチチャンネル再生は今回が初めてだったのではないだろうか。少なくとも筆者は今回のサラウンドデモが今まで聴いた中では最も優れたものと評するものである。会場隅の試聴環境としては比較的優れた部屋に入念に調整されたと思われる装置で再生されたその音は訪れたプロ達からも絶賛をされ、会場のいたるところでその噂が増幅されていた。Chesky Records を主宰するプロデューサー／レコーディングエンジニア David Chesky 氏をして「想像以上の優れた再生音。聴けて幸せだった」と言わしめたほどである。同時にこの会場では、Polyhymia のプロデューサー／バランスエンジニア Erdo Groot 氏、Channel Classics のプロデューサー／レコーディングエンジニア Jared Sacks 氏が DSD 録音の特長の解説や彼らの録音に対する思いを熱く語ってくれていた。

また、このショーでは数多くのライブ演奏が毎年人気をあつめているが、今年は米国のジャズ歌手 Lyn Stanley さんが Purist Audio Design のブースで同社製品によるアナログレコード再生とライブ演奏の比較デモを行ない多くの人を魅了した（写真 22a、22b）。彼女は 2 つのアルバムを SA-CD、LP そして 38cm・2 トラテープでも発売し、既にオーディオファンや音楽ファンから大きな評価を受けている。

それでは今年も会場の様子を写真でご紹介しよう。



(写真1)
おなじみ会場前のハイ
エンドショーの風船看板

(写真2)
会場に向かう人の列。
会場前には出展社の国々の旗が
なびく



(写真3)
今年は日本からの来場者が多く見
られた

(写真 4a)

今年大きな注目を集めた DSD ダウンロードによるサラウンドのサウンドデモ。前方面



(写真 4b)

来場者と後方スピーカー。画面左手が解説をする Erdo Groot 氏

Musikelectronic Geithain の 5 本の ME-180 を 3 台の Playback Designs の DAC/Amp IPS-3 でドライブしている。Playback Designs は Mr. DSD の異名を持つ Andreas Koch が設立した会社で、このイベントには彼の仲間でもある Polyhymnia の Erdo Groot 氏、Channel Classics の Jared Sacks 氏など第一線のレコーディングエンジニア達が協力してセットアップしたベンチャーイベントで、それだけに最も密度の濃い音を奏でていた。また、これらのエンジニア達がそれぞれの自分の録音したソースの解説に加え DSD に対する思いを熱っぽく語ってくれたのも印象的であった。



(写真 5)

セミナールームでは毎年話題の技術講演が行われる

今年注目を浴びたのは Andreas Koch 氏の DSD の DAC/Amp の解説だった。



(写真 6a) (写真 6b) ハイエンドショーにもヘッドホンブームがやってきた
コンデンサーヘッドホンの雄 STAX ブランドは海外でも健在。また今年もアジア系のヘッド
ホンメーカーの展示やデモが目立っていた。



(写真 7)

ヘッドホンアンプを展示デモする
LINNENBERG ELEKTRONIK

小さなオープンスペースに製品を並べ
ただけのブース。製品も DAC とヘッ
ドホンアンプ付き DAC の2機種のみ。
社長自らが説明員を務める。こんな小
さなメーカーが自由に参加できるのも
このハイエンドショーの面白さだ。



(写真 8)

ポーランドの Auto-Tech のホーン
スピーカー

今年は何故かホーンスピーカーが
目立った。



(写真 9) オーストリアの Vienna Physix の
ホーンスピーカーDiva grandezza、ミッドと
ハイがホーン、バスがアクティブのハイブリ
ッド構成



(写真 10) 初期のラジオ受信機のホーン
スピーカーを思わせる ONCE のスピーカー



(写真 11) 今年はこんな奇妙なホーン
スピーカーも展示されていた



(写真 12) 会場のオープンスペースにもアイコンのような大きなホーンが登場



(写真 13)

オープンテープテープデッキによる
サウンドデモ

昨年よりオープンテープのデモが増
えてきたが、今年もその傾向が加速
している。Studer C7 真空管式で未
だマニアには人気が高い機種である。



(写真 14)

ACOUSTIC SIGNATURE のター
ンテーブル INVICTUS

6 個のデジタル制御モーター、4 本
のトーンアームが搭載可能。ボード
は 3 重積層で共振を極限まで抑えた
という。下の照明付きラックと一体
型で重量は 210kg と超弩級。



(写真 15)

真空管アンプの雄 KR の Kronzilla

このショーでは未だに真空管アンプ
の人気が高い。流行に流されること
なく「自分の好きな音を求める」と
いう趣味として当たり前のことを皆
が認めているからであろう。



(写真 16)

カートリッジ針メーカー日本精機宝石工業 JICO のブース

今年より初参加の JICO、MM 型カートリッジの交換針では日本一。仲川社長自らも乗り込んで世界マーケットへの挑戦か。



(写真 17)

プログラムソースにダウンロードミュージックが台頭

今年も多くのブースで PC によるダウンロードミュージックを用いてのデモが目立ってきた。特にハイレゾの音源が普及しているのが分かる。



(写真 18)

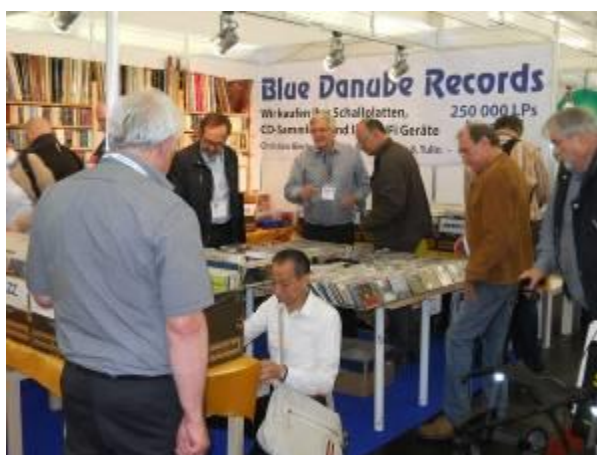
大型スピーカーを朗々と鳴らす MBL のブース

呼吸球式スピーカーで生演奏の雰囲気近づける設計思想の MBL の大型スピーカー mbl 101 Xtream。4 台の大型ステレオアンプでドライブする。ドイツの著名なピアニスト Martin Vatter 氏が自らの CD を用いて装置の解説に務める。



(写真 19)
仮設の野外レストラン

このショー会場には数カ所のカフェテリアや飲食できる場所が用意されている。会場巡りに疲れたら屋外でビールを飲んで一休み。久しぶりに再会した仲間とオーディオ談義に花が咲く。



(写真 20a) (写真 20b) オーディオレーベルや貴重品レコード即売コーナー

掘り出し物のレコードや入手が難しいオーディオレーベルのディスクなどを見つける楽しみもまたハイエンドショーならではのものだ。



(写真 21)
このショーの楽しみのひとつが数々の生演奏だ。それぞれが会場を巡りながら演奏をしてくれる

今年は新しく参加したクラリネット6重奏団「クラリッシュネットラ」の演奏が光っていた。これは特等席からのショット。

中でも目玉的なショーが Lyn Stanley さんの生演奏と再生音の比較試聴だった



(写真 22a) これは会場のモニターに映し出された彼女のイベント告知



(写真 22b)

Purist Audio Design ブースでの生演奏と再生音の比較試聴。連日大人気のブースで、ショー終了後に行われたアンケート結果で今年最高の演奏ブースと評された。



(写真 23a) (写真 23b) 今年も多くのハイエンドオーディオシステムが紹介され高級車が並んだ。ひと際来場者の目を惹いたのがロールスロイスだ



このロールスロイスのオーディオを手がけているのはLPGの子会社ETON、ビスポークでお客様の注文に細かく応じるというのが売り物である。

これ以外ではBurmesterがポルシェやメルセデス、Dynaudio フォルクスワーゲン、Cantonがスコダ、Meridian がマクラーレンやレンジローバーを手がけるなど車の世界での激しい競争が見て取れた。

こうして今回もこのショーを見ている限りハイエンドオーディオはまだまだ熱い。この熱風が今年も世界中に吹き荒れてくれることを切に願うものである。